

# 序

『平城宮出土墨書土器集成Ⅱ』を、奈良国立文化財研究所史料第31冊としてお届けする。

昭和58年に上梓した『平城宮出土墨書土器集成Ⅰ』は、幸いにして大変御好評をいただき、各方面において活用されている。今回は、その続編として平城宮跡から出土したもの約1,100点を取りあげた。ほとんどは『集成Ⅰ』以後に出土したものであるが、一部前回に報告した分の補遺と、溝辺文一氏のご好意により昭和3年および7年に岸熊吉氏が掘り出した墨書土器を掲載した。

新しく取りあげたものは、すべてまだ報告書を出すに至っていないものである。本来出土遺物の公表は、遺構との関連を充分検討し終えたのち、発掘調査報告書の中でとりあげるのが望ましい。あえて、単独の史料集として出版するのは、木簡をはじめ発掘文字史料が、それ自体としても、平城宮の研究に大変重要な役割を果たすと考えるからで、一日も早く大方の利用に供しようとするものである。したがって、出土遺構の説明はきわめて概括的なものにとどめていることをご了承いただきたい。

今回掲載したものの内容は多岐にわたるが、式部省や兵部省の官衙比定に重要な意味をもつ「式曹」,「兵部」,「兵厨」,また今までの文献史料にはみられない付属機関である「内木工所」など、新たな史料も含まれている。

『集成Ⅰ』を出版したころは、平城宮跡から出土した墨書土器は2,000点程度であったが、その後の発掘調査により、3,000点をこえるに至っている。とくに平城宮東方の南北幹線水路であるSD2700（通称東大溝）の発掘を数次にわたって実施したことが文字史料の大幅な増加をもたらした。

平城宮跡内の発掘に加えて、最近では、平城京での発掘調査も年々増加し、すでに1,000点をこす墨書土器が出土している。最近話題の長屋王邸跡からも遺跡の性格を検討する上で重要な墨書土器の出土をみるなど、その重要性が高まっている。これらを含めて、当研究所で保管する墨書土器は4,000点をこえ、今後もお増えつづけるものと考ええる。

これらは本史料集に引き続き刊行して大方の便に供したいと考えている。別のシリーズで進めている「平城宮木簡」とともに、平城宮研究の史料としていっそう御活用いただければ幸いである。

平成元年3月1日

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉